つながる

教育学部同窓会副会長
小林 由希恵

日頃より教育学部同窓会の活動推進にご理解とご協力を賜り、厚く感謝申し上げます。

現在、教育学部の校舎は改修工事に入っています。思い出の校舎が次第に姿を変えていくことに一抹のさみしさを感じています。

皆様はそれぞれに大学時代のよき思い出をお持ちのことでしょう。私は算数・数学科でしたので、当時白く輝きそびえ立っていた教育学部最高階の九階のゼミ室で長い時間を過ごしました。特にゼミ前日は仲間とともに深夜まで頭を突き合わせて予習をしました。そんな仲間と過ごした時間は、今も時折思い起こす大切な思い出です。そして、帰り際、九階の窓から見えるイカ釣りの漁り火が水面に反射して輝く様に感動し見入ったことも忘れられない一コマです。こんな思い出もまもなく昔話になってしまうのでしょうか。

コロナ禍、担当していた「同窓生の集い」が開催できない年がありました。そのときに、この教育新報の紙面をお借りし「先輩を訪ねて」というコーナーを特設させていただきました。先輩に学生時代のことをインタビューするという企画でした。先輩の語る分校や学生寮での話に驚いたりわくわくしたりしたこと、あふれるほどの教職への思いに触れ、それらを継いで自分たちが今現在教職に就いていることに胸が熱くなったことを鮮明に覚えています。私の文筆力では、そのときの感動までお伝えできなかったかと思いますが、思いをつなぐ一役を担うことができたように感じていました。

学んだ校舎は違っても、教職に夢をもって同じ学び舎である教育学部を巣立った私たち、そして今も日々学び続けている素敵な後輩たちがいます。個人的に先輩から話を聞いたり、大学で学ぶ学生や指導に携わる大学の先生方からお話をお聞きしたりすることは難しいことでしょう。是非、この教育新報や毎年九月に実施する「同窓生の集い」を通じて、仲間や大学とつながっていることを感じてください。そして、実際につながっていただけたらと切に願っています。

花鳥風月

「今日は学校で何をした？」これは多くの家庭で行われている親と子どもの会話だと思います。さて、子どもはどのように答えるでしょうか。年齢や学年によっても答え方や答える内容量が異なると思います。しかし、このやり取りはとても大切な家族間でのコミュニケーションです。そのやり取りのベースになるものは何でしょうか。

一つ目は、子どもが「今日は〇〇の学習で〇〇をして〇〇だったよ！」「〇〇さんが〇〇して〇〇だったよ！」などと学校でのことを語れるよう、充実した学習活動を行うことです。

二つ目は、親が学校の様子を知る手段があることです。手段の一つとして学校便りや学年便りが挙げられます。その他には学校のホームページがあります。子どもの話とホームページで知った内容を合わせると、より濃い内容の話ができるでしょう。

これからもどうすれば魅力的な学習活動をデザインできるか、学校の様子をどのように伝えるかを考えることが必要ではないでしょうか。

（広報部　山本　桜平）

情報交換　情報発信

新潟大学
教育学部同窓会
ホームページ

学校紹介①

地域とともにある学校

～お宝は学校・家庭・地域のゆるぎない絆と子どもたちの笑顔～

田上町立田上小学校

当校は、あじさい園が有名な護摩堂山の裾野に広がる高台に位置し、創立百五十一年目を迎える歴史と伝統ある学校です。学区の一級河川才歩川（さいかちがわ）は下流で信濃川に合流します。校舎屋上からは、広大な蒲原平野を一望できる自然豊かな環境にあります。令和六年度は、全校児童百九十一名が学び、三十二名の職員が勤務しています。

田上町には町立の幼児園と、二小一中があります。各園校では、「田上の十二か年教育」の下、家庭・地域とともに、幼小中連携教育を推進しています。

一　宝物紹介（1）
～田上ふるさと学習の充実～

当校では「ふるさと田上に愛着と誇りをもつ児童」の育成を目指し、生活科・総合的な学習の時間で地域学習（田上ふるさと学習）を推進しています。地域を巻き込んだ持続可能な活動にするために、本年度の学校運営協議会では全職員が参加して、活動を進める上で困っていることや不透明なことを地域コーディネーターや学校運営協議会委員の皆様と一緒に考え、助言してもらいました。

六年生は、田上の名産品「越の梅」の生産者から学んだことを生かして梅ゼリー作りに挑戦しました。五年生は、米や米粉の販売、地域のパティシエと連携し田上の桃を使ったジャム作りに挑戦しました。高学年は、田上の特産品を使った商品づくりを企画してそのおいしさを町内外に発信することができました。四年生は「信濃川サミット」に参加して才歩川の生き物の豊さや才歩川と信濃川とのつながりについて発信することができました。三年生は学校裏の竹林で筍掘りを楽しんだ後に、竹を使ったおもちゃづくりに挑戦し、地域の幼児園や幼稚園を訪問しておもちゃを紹介する活動に発展させました。一、二年生は地域の公園や温泉旅館等に出かけ、田上のよさをたくさん発見することができました。どの学年も職員だけでは実現不可能なことを地域の様々な人を巻き込み、実現可能な活動にして、充実・発展させることができました。このように学校・家庭・地域とのゆるぎない絆による教育活動の充実が当校の宝物です。

二　宝物紹介（2）
～学校の歴史と共に百五十一年～

当校の校歴室には甲冑（かっちゅう）が飾ってあります。昔の道具や教科書等が残っている学校も少なくなりましたが、甲冑があるのは珍しいです。田上町広報誌「きずな（昭和五十七年三月号）」によれば、当時の校長が甲冑について知っている人がいないか呼びかける記事が載っていました。当時の記事から甲冑は、初代校長の家に代々保管されていたものであることが分かりました。しかし、どうしてそのような歴史的な物が学校にあるのかについて知っている人はいなかったそうです。創立記念集会で現校長が甲冑の歴史を紹介すると、子どもたちは目をキラキラさせて聞いていました。田上小の一番のお宝は、子どもたちの輝く笑顔です。

（文責　教頭　荒井　純）

令和六年度　会務報告

令和六年

4・3　入学式・保護者懇談会
教育実践学研究科
入学ガイダンス

4・11　令和五年度会計監査会
（アートホテル新潟）

5・11　第一回本部会（新潟教育会館）
【評議会に向けての議案審議、決定】

6・8　評議会（新潟教育会館）
【令和五年度会務報告・決算報告】
【令和六年度活動の重点・専門部活動計画・役員及び予算案承認】

7・20　支部長・学科代表者会

8・24　教育新報「第187号」発行

9・21　カミングホームディ
（ホテルサンルート新潟）

10・19　第49回同窓生の集い
（アートホテル新潟）
新潟大学創立75周年記念式典
（ANAクラウンプラザホテル）

令和七年

1・23　大学教職員と同窓会との懇談会・懇親会
（アートホテル新潟）

2・20　教育新報「第188号」発行

3・1　第二回本部会（実施予定）

3・24　卒業式・祝賀会

学校紹介②

地域から学ぶ学校

～中高連携『阿賀町の「ひと・もの・こと」から学ぶ』～

阿賀町立阿賀津川中学校

当校は、飯豊連峰の山並みから、南方の御神楽岳など山々に囲まれ、町の中央を悠々と流れる大河阿賀野川、清流常浪川によって育まれた山紫水明の地です。

今年度は、全校生徒百四名、六学級（特別支援三学級を含む）です。素直で人懐っこい生徒が多く、生徒と教職員の関係も良好で学校全体がほのぼのとした雰囲気に包まれています。

地域の方は、協力的で、積極的に関わっていただき、生徒の学びの幅を広げてくれています。

「阿賀町最高プロジェクト」

阿賀黎明高校との連携学習

当校では、以前より阿賀黎明高校との連携を実施しています。昨年度からは、阿賀町を知り、阿賀町の課題について考え、活かす、ミッション型プロジェクトに現在の二年生が取り組んでいます。

昨年は、一学期に阿賀町を深く知るために阿賀町再発見で「ひと・もの・こと」について調べました。

二学期には、高校生のプロジェクトに参加して、どのように学習を進めていくかを学び、その後、阿賀町の様々な分野の「ひと」を通して、より深く阿賀町の「ひと」「もの」「こと」を知る活動を展開しました。

「ひと」「もの」「こと」を知る中で、阿賀町の活性化につなげようと、自分の課題を見つけました。それを解決するためのプロジェクト実施に向けて班に分かれての計画作りが始まりました。

二年生になり、昨年から考えていた計画を、高校生に向けて発表をしました。発表の後、意見交換を行い、高校生から貴重な意見や質問をしてもらい新たな発見をすることができました。

その後、プロジェクトに参加していただいている地域の方々（講師）と共にさらに計画を練り上げ、十月には阿賀町の人々をお招きして阿賀町最高プロジェクトとして、福祉（お年寄りと楽しく交流）、防災（阿賀町の食材を使った防災食）、スポーツ（スポーツを通した交流）、食（地場産食材の利用）、自然（森林の活用）、歴史（阿賀町の歴史展示）といった各班の実践を行いました。どの取組も参加された地域の方から好評をいただきました。

そして、これらの実践をもとに阿賀町の小中高が一堂に会して行う「阿賀町未来フォーラム」で実践したことを発表しました。

発表の後、高校生と共に阿賀町の未来について意見交換を行いました。

中高連携の活動を通して、高校生と共に学習し、高校生の学ぶ姿、考えに触れることで、一人一人が今後の自分のあるべき姿を考えるきっかけとなりました。

（文責　校長　国本　力）

事務局だより

新しい歴史のスタートに向けて

今年度は、新潟大学創立75周年記念式典・祝賀会が十月十九日に盛大に行われました。五百人を超える参会者が75年の歴史を振り返り、改めて母校への思いを強くいたしました。

さて、三年後の令和九年度は、私たち教育学部同窓会が創立75周年を迎えます。そのため、本年度は「特設委員会」を設置し、どのような事業を行うのか相談を始めました。その話し合いの中で、「まずは大勢の会員が集える会にしたいね。」という意見が大勢の委員の方から出されました。コロナ禍で、集うことが許されない時期があり、もしかしたら集まることの意欲やスキルが希薄になったのではないかと危惧しております。

ですから、令和七・八年度のあり方が大変重要になります。会員の皆さんが力を合わせて、もう一度先輩が築いてくれた75年の歴史を振り返り、新たな歴史を作っていきたいものです。そのためには、各学校では、会員相互で、支部では支部長さんを中心に、そして学科では様々な集まりの中で私たちの75周年を話題にしていただきたいと思います。三年後の成功は今から始まっています。

第四十九回 同窓生の集い報告

研修部長　坂内　徹

九月二十一日、アートホテル新潟駅前において同窓生の集いが開催されました。「**子どもの感性がつなぐ命、そして平和**」と題して、新潟大学教育学部、学部長の柳沼宏寿様よりご講演をいただきました。

一　講演会

○柳沼宏寿様　プロフィール

福島県ご出身です。福島県公立中学校教諭を経て、二〇〇五年新潟大学教育学部准教授。二〇一二年四月より新潟大学教育学部教授。今年度、四月より新潟大学教育学部学部長を務めておられます。美術教育における学びを授業研究や地域連携アートプロジェクトを通して研究しておられます。

○ご講演

ご自身が取り組んでこられた美術教育、子育ての経験談、大学の授業の取組等について参会者に優しい語り口で熱く伝えていただきました。

中学校で勤められた時のお話です。総合的な学習の時間が始まったばかりの頃、ダイナミックな教育活動を展開されていました。歌手の原田真二さんの音楽を子どもたちに聴かせたところ、とてもよいイメージをもったので直接原田さんにメッセージを送り、学校に来てもらうことが実現したそうです。当時始まった環境学習とからめ、教職員にも働きかけて全校体制で関わるダイナミックな教育活動も展開されていました。新潟大学に来られてからは、地域や学校と一体となった取組を意欲的にされてきました。

後半は命にかかわるお話をお聞きしました。ご自身の家庭や子育ての体験などをエピソードを交えてお話していただきました。

また、大学で学生の保護者が子育てで奮闘していた当時にメッセージを伝えるという授業をされたそうです。このメッセージの紹介が参会者の心に響きました。また、十日町松之山での戦争中の子どもたちが描いた絵のデータベース化を学生と行っていることなど、平和への思いもお話しいただきました。

講演会の感想では、心を打たれた、感動したという声が多く聞かれ、参会者の心に響く講演となりました。

二　懇親会

柳沼宏寿学部長様、高木幸子教育実践学研究科長様をお招きし、盛大に懇親会を行いました。講演の感想や当時に思いを馳せる会話が広がる和やかな会となりました。次年度、会員の皆様のたくさんの参加をお待ちしております。

新潟大学創立七十五周年 記念式典並びに 記念祝賀会

広報部長　栗田　貫

令和六年十月十九日（土）「新たな挑戦　大きな貢献」のスローガンのもと、新潟大学創立七十五周年記念式典並びに記念祝賀会が、中央区のＡＮＡクラウンプラザホテル新潟で開催されました。

記念式典では、学長式辞に続いて、文部科学省、新潟県、ハルビン医科大学、インド宇宙科学技術大学、シドニー工科大学からのご来賓より祝辞を賜りました。その後の祝典演奏がお祝いの雰囲気を盛り上げました。

牛木辰男学長からは式辞の中で、次のようなご挨拶を賜りました。

新潟大学は、「自立と創生」を理念とし、教育、研究、社会貢献という見地から、新潟という地に立地する国立大学として、地域のみならず世界の発展に資する「知の拠点」としての役割を果たしてきました。

創立七十五周年という節目を迎える今年、これまで本学を築き上げられてきた方々、本学を巣立ってくださった学生の皆さん、本学をサポートしてくださった社会や企業の皆様方に、改めて深く感謝を申し上げます。

新潟大学は、現在掲げる「未来のライフイノベーションのフロントランナーになる」というミッションのもとに、また次の一歩を踏み出します。（一部略）

牛木学長　式辞

祝賀会では、祝舞や鏡割りが行われ、参加者全員で創立七十五周年をお祝いしました。

これまで輩出した卒業・終了生も十六万五百人を数えます。新潟大学は、創立八十周年に向けて、また新たな一歩を歩み始めました。

教育学部・教育実践学研究科教職員と同窓会との懇談会・懇親会 報告

交流部　藤塚　静治

一月二十三日（木）、アートホテル新潟駅前を会場に、「令和六年度新潟大学教育学部・教育実践学研究科教職員と同窓会との懇談会・懇親会」を開催しました。

学部並びに教育実践学研究科からは、柳沼宏寿様・高木幸子様を始め12名の教職員の皆様から、同窓会からは臼杵勇人会長以下12名が出席しました。今年度を総括する事業であり、有意義な情報交換が行われました。

懇談会では、臼杵同窓会会長から、社会情勢を背景とした教育界の最新情報と課題、同窓会創立75周年に向けての挨拶などがありました。学部長の柳沼様からは教育学部の現状と教員確保に向けた学部の取組を、教育実践学研究科長の高木様からは研究科の基本理念の実現と主体的に学ぶ機会における院生の積極的な姿についてお話をいただきました。

同窓会からは、各専門部等（事務局・研修部・広報部・組織部・交流部）が今年度の事業概要について報告を行いました。意見交換後、最後に小泉浩彰同窓会副会長の「学びの先に子どもの未来がある。学びの環境づくりに同窓会も支援していきたい」という熱のこもった挨拶で会を閉じました。

懇親会では、北村繁副学部長様からの乾杯のご発声を皮切りに、懇親を大いに深めることができました。懇談会での話題を基に新潟の教育の現状や未来の在り方、双方の夢や願い、そして今後の期待など幅広く情報を交わし合いました。

締めくくりは、教育実践学副研究科長の大庭昌昭様から気勢を上げていただくとともに、小林由希恵同窓会副会長の勤務校での温かな様子を交えた挨拶で、和やかに会を閉じました。

なお、本年度のカミングホームディは、ホテルサンルート新潟において、夏のホテルランチを囲んで行われました。総勢19名で楽しいひと時を過ごすことができました。組織部と連携をして事業を進めると共に、学務課様よりご理解をいただきメールにて学生の皆さんにご案内することができました。学部で共に過ごした卒業生と院生が楽しく関わる場面も生まれ、よい機会となりました。

新大体育会並びに新大同窓会保健体育科の集い

令和六年十一月九日、「新大体育会並びに新大同窓会保健体育科の集い」を開催しました。新潟大学より、教職大学院の大庭昌昭教授、保健体育・スポーツ科学講座の檜皮貴子准教授、和久井健吾助教にご来賓として参加いただきました。

大庭先生からは、本年度新潟大学創立七十五周年記念式典の内容や取組について報告がありました。新潟大学は創立七十五周年ですが、教育学部としては、前身である官立師範学校の設立（一八七四年）から一五〇年の歴史があることや保健体育科の変遷や現状についてもお話がありました。

今年度の集いには、大学教官の働き掛けもあり、現役の学生からの参加が多くみられ、また、令和に入ってからの卒業生もたくさん参加していただきました。これまでになかった若い年齢層の皆さんからの参加により、雰囲気も変わりました。教育現場で活躍する先輩から現役の学生まで世代を超えて懇親を深めることができました。

教員不足の問題が叫ばれる昨今です。学部生の入学定員が五百人弱の時代から現在百八十人に減少していることや、小学校の教員志望不足などの課題に対応し、大学でも教員免許取得の方法や教員志望者への推薦入試の取組を充実させるなどの工夫を行っています。教職員と学生のコミュニケーションや教育現場との交流も今後の課題として挙がっています。その意味でも、本会は、教育現場と大学の距離を縮める意義のある会であることが確認できました。

参加者による記念撮影

本会では、毎年二月に新潟大学教育学部で行われる卒業論文発表会にも参加し、学生とのかかわりを継続しています。

令和九年度には、教育学部同窓会創立七十五周年記念事業が予定されています。本会も、これまでの先輩の皆様が築いてこられた同窓生のつながりを大切にし、さらに新潟県・新潟市の教育の発展に寄与することができるよう尽力して参ります。

（文責　学科代表　栗田　貫）

会員の広場

理科の魅力を伝えたい

見附市立新潟小学校
野村　恭一

教職に就いてから、二十年以上が経つ。小学生の時に、教師になりたいと思うようになった。この頃は単純な憧れだったかもしれないが、教師になりたいという思いは変わらなかった。中学生の時に、理科の先生が理科の魅力を気付かせてくれた。実験や観察を通じて理科の不思議さが分かり、興奮と喜びを感じることで好奇心が芽生えた。この経験から、大学では専門の教科を理科に決めた。

理科の魅力は、中学生の頃に感じた、不思議さや好奇心だと考えている。理科を教えている中で、「どうしてこんなことが起こるのだろう？」「今度やってみよう！」という子どもたちに出会ってきた。この不思議さや好奇心が、これまで教師を続けている一つの大きな理由だと思う。その感動が原動力になり次の世代へと繋がっていく、そんな魅力のある仕事なんだと感じる。これからも子どもたちに、理科の魅力を伝えていきたい。

十周年

小千谷市立総合支援学校
高橋　豊

小千谷市立総合支援学校は、平成二十六年四月一日に、地域の皆様や関係の皆様の特別支援教育にかける熱き願いと期待を担って開校しました。そして、今年度、開校から十周年、十一年目を迎えることができました。開校時に制定された学校教育目標「地域とともに自分らしく生活する子ども」には、学校開設に込められた思いや願い、そして、児童生徒に願う姿が重ねられています。そして、この願いは、この十年間受け継がれてきました。

児童生徒は、地域の自然や施設を利用したり、地域の方から提供していただいた教材を活用させていただいたりしながら学習をしています。そして、高等部の生徒は、地域の企業の皆様や事業所の皆様に職場実習の受け入れをしていただき、働くことについて学んでいます。これも、地域・関係機関・保護者の皆様からの温かいご支援とご協力によるものと感謝しております。

過去十年間の歴史や軌跡に敬意を払うとともに、今後も地域に支えられ、児童生徒一人一人の学びを積み重ねられる学校となるよう取り組んでいく気持ちを強くしています。

「自己肯定感」について思う

胎内市立築地小学校
宮川　和久

新潟大学を卒業し教員になり二十八年。教頭になって二年。子ども、教職員の姿から、今更でありますが、自己肯定感の大切さを感じています。

子どもにとって、学習、生活、運動、「頑張った」「できるようになった」等の自己肯定感の積み重ねが自信となり将来への力となります。学校生活に困難を抱える子に対しても、自己肯定感を高めることを第一に考えます。

教員の働き方改革にしても然り。時間外勤務削減に向けた業務の精選が大切です。しかし、教材研究、学級経営、行事運営など労力を費やしたとしても、教員の仕事に魅力、やりがいを感じられるかを大切にしたいです。教員の努力と工夫が子どもの輝きにつながり、教員の自己肯定感を高めていく。これが真の働き方改革と考えます。

管理職としてまだまだ力量不足を感じる日々ですが、失敗や苦労を経験値とし、自らの自己肯定感を高め、職員、子どもに還元していきたいです。

コロナ禍で得たもの

南魚沼市立おおまき小学校
瀧本　樹

採用されて三校目の学校に赴任する年にコロナで世界は大きく変わった。休校、外出時の気遣い、人との距離等、ネガティブな事が多くあった。そのような状況でも自分の生活を充実させられるものはないかと考え、実践したのが走ることだった。もともと好んで運動をしていたが、走ることは人と距離が取れ、好きなときにできるよさがあった。四十歳になる今でも10㎞、ハーフマラソン、フルマラソンで自己ベストを更新している。

ランニングを続けていると、走っているときに頭の中を整理することができるようになった。例えば、授業をどう進めていくか、この児童にはどうアプローチするか、行事の段取り等である。ふと始めたことが趣味になり、仕事も効率的になり、今では切り離せないものになっている。

様々な状況でのよい経験、苦い経験でも捉え方次第で豊かな人生にしていけると感じている。

中学校でのサービス・ラーニングにおける生徒の主体性の伸長にかかわる教授行動の検討

学校経営コース　伊藤　　裕（新潟大学附属長岡中学校）

１　本研究の目的

本研究は、中学校でのサービス・ラーニングにおける子どもの主体性の伸長に促進的に作用する教師の教授行動にどのようなものがあるか明らかにすることを目的とする。

２　１年次研究の概要

１年次研究では、実習校で行われる地域と連携するサービス・ラーニングを対象として、研究協力への同意を得た研究協力教員（以下、授業者）の授業記録から、子どもの主体性とその伸長に対し促進的に作用した教授行動について、分析と考察を行った。

３　１年次研究の考察

授業記録で確認された授業者による働きかけのうち、学級全体への指示や説明を除いた、個人やグループに対する教授行動を次の４つに分類・整理した。

①整理・関連付けの促し【整理・関連付け】
②肯定的頷き【肯定的頷き】
③新しい考えの引き出し【考えの引き出し】
④サマライズ・補足【要約】

４つの教授行動の出現頻度には差が見られたが、子どもの話合い活動が最後まで停滞することなく継続して行われるなど、学習に対して意欲的に取り組む、主体性が発揮された姿が見られた。

４つの教授行動のうち、【要約】【考えの引き出し】は、活動が停滞している子どもやグループに活発な話合いをもたらし、【肯定的頷き】が適度なタイミングで行われることで、子どもの発話が価値付けられ、子どもの話合いが活性化していると考えられる。また、【整理・関連付け】は、子どもに新たな視点を獲得させ、思考の行き詰まりを打開するものとして機能していると考えられる。これらの教授行動が望ましいタイミング・回数で行われたことにより、子どもの学習に対する主体性が伸長され、授業者の教授行動が少ない状態でも話合いが継続したと考えられる。

４　２年次研究の方向性

２年次研究では、１年次研究で見出した４つの教授行動に対人援助理論の１つである「動機づけ面接」を理論的背景として位置付け、授業実践を通してその有効性の検証を行う。その際、授業記録の分析だけでなく、生徒質問紙調査の実施や結果の統計解析、授業者へのインタビューなど、多角的に教授行動の有効性の検証を行う。

教職大学院生　１年目の実践報告

総合的な学習の時間の新単元「夢中」の開発

学校経営コース　福原　啓介（新潟市立亀田小学校）

本実践の目的

本実践は、児童がコンテンツを消費していく学びから、コンテンツを生産する学びへと変換させることを目的とする。新単元「夢中」では、３年生以上の児童が自分で決めたテーマに向かって異学年の児童とかかわりながら探究的に学び、成果物をクリエイトしていく。これらの学びを通して、少し辛くても、自分が選んだ道を力強く切り拓いていく児童の育成を目指す。

新単元「夢中」の目標

- プログラミングなど様々なデジタルツールを使いこなし、情報収集･整理･分析ができる。【知識･技能】
- 自ら課題を発見し、論理的な思考力と創造性を活かして問題解決の方法や手順を考えている。自らの思いを成果物として表現している。【思考力･判断力･表現力等】
- 成果物について自己評価を行いながら、目標に向かって継続的に学習に取り組んでいる。【学びに向かう力、人間性等】

単元計画作成における基本的な考え方

指導体制

使うアプリや制作したいものを基本として、３～６年生、20～30人程度のチームを作り、活動教室を割り当てる。異学年、複数のテーマ、複数使用アプリが混ざり合う教室環境となる。３年生以上の学級担任が、一つのチームの担当として指導に当たる。担当者は、児童の姿も見取りつつ、自分の成果物作成に取り組む。担当者が楽しく取り組む姿は、児童にとって好ましい学習環境の一つになり得ると考えられる。

制作活動の実行

夢中の時間になったら、必要な道具を持ち活動場所の教室へ移動し、個人で制作活動を進める。基本的に制作については個人の計画によるが、より質の高い学習となるよう、必要に応じて担当者が助言や支援をする。粘り強く取り組む中で自分の学習を調整できる姿を求めていく。安易な達成度で満足することなく、児童たちが目的意識をもって追究し続け、達成感・成就感を味わうことができるよう配慮していくことも大切にする。

制作活動の振り返り

毎時間の活動の最後に、５分程度の振り返りの時間を設定する。振り返りを通して、制作活動の達成感・成就感を確かめる。また、次時の制作活動についても見通しをもたせ、次時にすぐ活動に入れるようにする。

大学のコーナー

教職大学院における国際交流事業

新潟大学大学院教育実践学研究科　雲尾　周

教職大学院の授業は、通常、教育課程の編成・実施、教科等の実践的な指導方法、生徒指導・教育相談、学校経営・学級経営、学校教育と教員の在り方、という５つの領域から構成されている。新潟大学では独自に第６領域「特別支援教育」を設定、２科目を必修とし、第５までの各領域２科目ずつある選択必修科目からは全領域を網羅したうえで８科目以上の履修としている。

選択科目は教育実践、教科教育実践、特別支援教育、学校経営の科目群から、自専攻に合わせ４科目以上履修する。

この他、教育実践探究に関する科目（いわゆる少人数ゼミで、実習の進捗状況や研究の進め方を検討し、実践報告書の執筆・完成につなげる）４科目と教育実習10単位（以上）を履修し、合計で46単位以上を修了要件とする。教職大学院における教育実習は、学部生が教員免許取得のために広く学ぶようなものではなく、自らの研究テーマに沿って行うものとなっている。

これらの科目の中で、選択科目に新設した「グローバル教育実践演習」を中核に、院生とともに国際的な研究・教育交流を進めている。

もともとは、２００１年度より教育人間科学部学習社会ネットワーク課程において国際交流事業を展開し、教員数名と学部生10数名が北京師範大学・北京聯合大学を訪問して学生同士の討論会などの交流を行ってきた。２００６年度より北京師範大学珠海分校を訪問し始め、広州市にある南奥実験学校へも足をのばす中で、学部生による中国の子どもたちへの授業による交流を開始した。ここで、学習社会ネットワーク課程学生のみならず、学校教育課程（２００８年度入学生より学校教員養成課程）の学生も参加し、音楽や日本紹介などの授業を中国の小学生に行い、中国の先生の授業も参観し、お互いの授業検討会を行うなどしてきた。

教職大学院が設置された２０１６年度から２０１９年度までは、教育学部の国際交流事業に教職大学院生も同道した。北京師範大学珠海校で大学院生同士の研究発表交流会を開催し、南奥、ならびに恵州実験学校において学校見学の後、学部生および大学院生による授業を行い、授業検討会を開催した。それぞれの学校において、日本側の授業と中国側の授業を併せて地域の学校への公開研究会としていた時は、多くの参観者が見学をしていた。中国の教員は５年間で３６０時間の研修が義務付けられていて、この研究会もそれら研修の対象となっているため、参観者はノートに様々記録を取っていた。

附属学校も交流を行っている。２００３年、北京師範大学実験小と新潟小が交流協定を締結、２００７年に南奥実験学校（９年制）・南奥幼稚園と長岡幼・小・中の交流協定が締結された。インターネットを介した交流、日本からの訪問は少ないが中国からの子どもたちの来訪、あるいは中国の先生が来日して日本の学校での授業なども行われてきた。

附属の交流をより活発化するため、協定を拡大した。２０１９年11月、南奥２校と長岡３校園であった協定を、北京師範大学珠海校が指導する中国南部の４校と附属全６校園とした。北京においても１対１交流から、北京全４校園と附属全６校園の交流協定とした。中国の校数は少なくとも、例えば北京の幼稚園は分園を併せて幼児数３０００人と驚く規模であったりする。益々の交流拡大を期待できる状況となった。

しかしその翌月、２０２０年２月末から学校の全国一斉休業が始まり、国際交流にとっても苦難の期間となった。その間も附属学校はそれまでと同じく授業交流を継続し、大学では中でも２０２１年12月18日に日中国際交流フォーラムを開催したりした。

行動制限が緩和され、ワクチン接種も回を重ねた２０２２年度、中国はまだ入国できそうもなかったので、教員５名、院生３名で、ソウル教育大学校の院生との交流、ソウル市教育委員会での教員研修の聞き取りなどを行った。

２０２３年度は訪中交流を再開したが、この間に北京師範大学の改組があり、完全大学院化、しかも博士課程の院生との研究交流となった。幼稚園長の園舎建築を含めた研究実践、主幹教諭の世界大会で発表した環境総合学習など、博士論文を目指す素晴らしい研究が報告された。この訪問時、雲尾も授業をした。といっても、院生が体育で剣道を教えるということから、元立ちとなり、院生の技を受け、子どもたちの面打ち込みを受け続けたのみであるが。

２０２４年度は、中断していた恵州、貴州省の学校も訪問した。雲尾は短縮日程で旅費は15万円だったが、全日程参加院生は20万円ほどになる。経済的負担が交流の壁になるともいえるが、それ以上の価値は十分にある。

２０２５年１月、中国の学校の子どもたちが新潟を訪問し、初めて見る雪に大喜びしながら、訪中をしなかった院生（およびその子ども）も交流を深めた。

従来から、中国での交流会・学校見学を日本とつないで、中国に行かなくとも参加できるようにしてきた。新潟市教委、校長会とも協働してきたし、在籍院生だけでなく修了生も訪中参加した。同窓会の支援・参加を得て、一層の交流拡大が図れれば幸いである。